

住宅&住宅設備トレンドウォッチ

住まい・暮らしレポート

住宅&住宅設備トレンドウォッチ

平成の家族。 ～「暮らし」と「食」をデータで振り返る～ Part4 平成30(2018)年



2019.8.23

1986年設立の「都市生活研究所」は、多面的な調査・分析をもとに、都市生活者の暮らしを創造するための提言を行っています。都市生活研究所では蓄積してきたデータを基に、「平成」という時代を、ある家族の物語とともに振り返りました。全4回のうち、第4回となる本レポートは、「価値観の変化」をメインテーマに、平成30(2018)年をご紹介します。

<家族の物語>

愛は32歳になり、夫との間に2歳の娘が誕生していました。翔太は外資系企業に勤め、ワーク・ライフ・バランスをうまくとった人生を楽しんでいます。62歳になった隆は再雇用で、今も保険会社に勤め、恵子は仕事と孫の世話で、忙しくも、充実した生活を送っていました。

<家族構成>

夫・隆(62歳) 妻・恵子(58歳) 長女・愛(32歳) 愛の夫・大輔(32歳) 愛の娘・葵(2歳) 長男・翔太(30歳)

<価値観の変化>

男女間の感覚も、会社選びの感覚も、世代間ギャップがあります。

1 彼女とのデートで、おごろうとしない翔太。心配してしまう隆 若い世代では、ワリカンがふつうになっています。

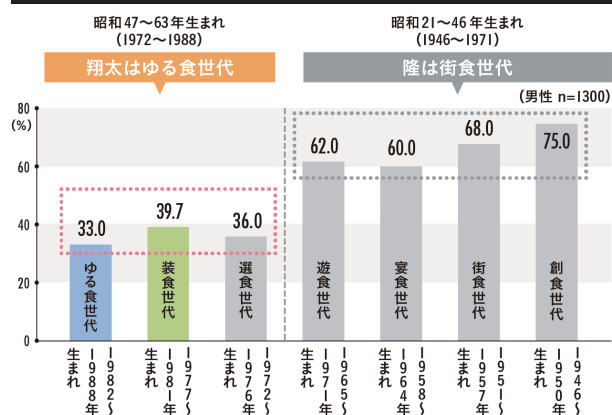
「えっ、彼女とのデートでワリカン？ それで大丈夫なの？」。隆の語気があまりに強かったので、翔太は「彼女も働いて稼いでいるわけだし……」と答えるのが精一杯で、たじろいでしまいました。

隆が独身だった時代、デートの費用を女性に負担させることは、どちらかというところ「非常識」でした。

「デートの食事代は、男性が払うのが自然だ」という設問に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた男性の割合は(図1参照)、世代^{※1}によって明確に異なりました。昭和47(1972)年以前に生まれた「創食～遊食」世代は6割以上が「男が払うもの」と答えたのに対し、昭和47(1972)年以降に生まれた「選食～ゆる食」世代は3～4割。バブル期までの世代と就職氷河期以降の世代で、価値観が大きく異なっているようです。

※1 都市生活研究所オリジナル世代区分「食・世代」は、昭和生まれの生活者を「食」という切り口で定義しています。食生活は、時代背景(社会事象、流行、教育)や生活者の価値観の変化などと密接に関わりあっています。そのため「食・世代」は、食分野のみにとどまらず暮らし全般において、生活者の価値観や行動の特徴を示すことができると考えられます。

図1. デートの食事代は、男性が払うのが自然だ。



出典：東京ガス都市生活研究所「ゆる食・装食世代のライフスタイル」2014年



世代間で大きなギャップが見られます

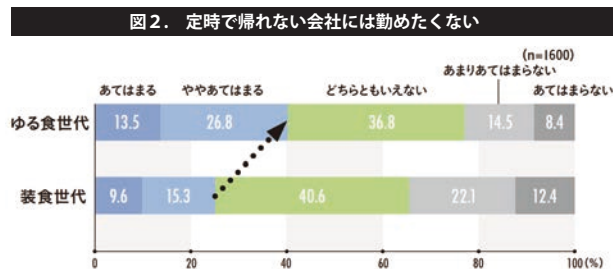
2 海外文化にもなじむ翔太は、隆に理解できない感覚の持ち主

「定時で帰れない会社はNG」の若者が増えています。

翔太は30歳。外資系企業に勤め、会社から30分圏内にあるシェアハウスで外国人と生活しています。

「毎日、18時には帰ってみんなと料理するんだ。いろんな国の仲間がそれぞれ自国の料理を作るから楽しいよ」と言うではないですか。定時には帰るけれど、仕事には大きなやりがいを感じている。んん？このあたりの感覚が、隆にはピンときません。

図2は、昭和52（1977）～昭和56（1981）年生まれの「装食世代」と昭和57（1982）年～昭和63（1988）年生まれの「ゆる食世代」を対象に「定時で帰れない会社には勤めたくない」かどうかを聞いた結果です。「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人の割合は、「装食世代」の24.9%に対して「ゆる食世代」は40.3%。無理をしない「ゆる食世代」の特徴が表れています。



出典：東京ガス都市生活研究所「ゆる食・装食世代のライフスタイル」2014年

<全員子育て>

ママがフルタイムで働くのが当たり前。支え合っただの子育てが必須の時代です。

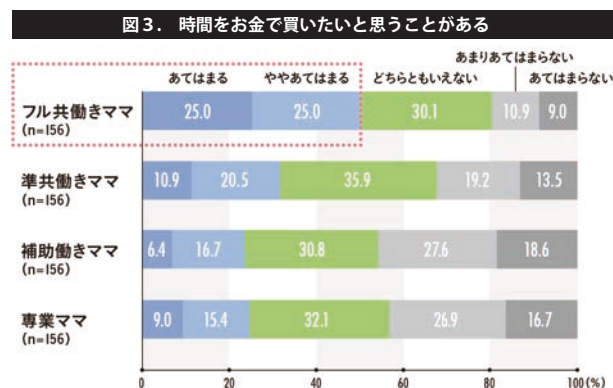
3 夫は協力的でも、「自分の時間」はほとんどない愛

「共働きママ」の忙しさが際立っています。

「行ってきますっ！ 大輔、悪いけどあとお願いね」

長女が愛が、朝食もそこそこに出かけていきます。3年前に結婚して1児の母。実家のそばにマンションを購入し、今も正社員としてフルタイムで働いています。愛の夫・大輔は大学時代の同級生でメーカーの研究員。愛の実家近くに住むことにも賛成してくれました。恵子は出勤日を減らして週2回、保育園へのお迎えを手伝っていますが、自分の子育て時代とはまったく異なる「共働きママの忙しさ」に驚くばかりです。

図3は、ママたちの時間意識に関する調査結果です。働き方で分けた4タイプを比べると、フル共働きママ^{※2}は「時間をお金で買いたいと思うことがある」と答えた割合が他のママたちに比べて高く、「時間が欲しい」という切実な思いが表れています。

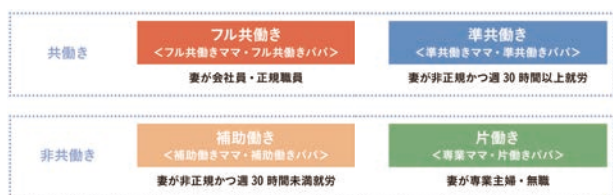


出典：東京ガス都市生活研究所「共働きの家計に関する調査」2016年

※2 共働きの定義

一口に「共働き」といっても、妻がフルタイム正社員の家庭と週2～3回の短時間パートの家庭では、ライフスタイルや価値観は異なると考えられます。

そのため、都市生活研究所では、妻の働き方によって子育てファミリーを以下の4つのタイプに分類し、定義しました。



※夫はすべて、週30時間以上就労の被雇用者

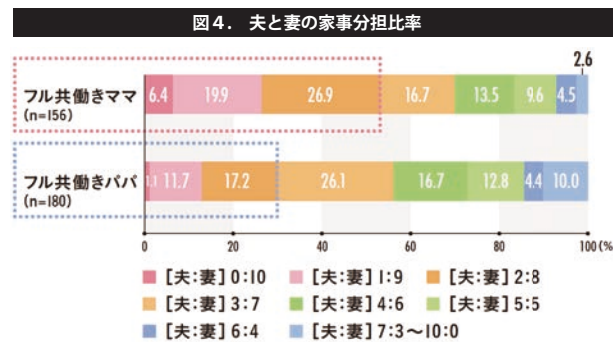
4 愛の夫・大輔は、朝も晩もしっかり協力していますが……

個人化が進む中で、「家族の一体感」が重視されました。

愛の夫・大輔が、仕事の休憩中に先輩研究員と話しています。「いやあ、仕事しながら子育てはたいへんですね。楽しいですけど」「ちゃんと分担してる？ 家事とか育児とか」「朝は子どもを保育園へ送って、夜は夕食の片づけや部屋の掃除、風呂も洗っています」

なかなか自信たっぷりですが、果たして愛は、大輔の協力に満足しているのでしょうか。

子育て中のママとパパに「夫と妻の家事分担比率は？」と聞いたところ、フル共働きパパでは「自分は2割以下」と答えた人は30%であるのに対し、「夫は2割以下」と答えたフル共働きママが半数以上という結果が出ています。以前に比べると、家事分担している夫は増えていますが、自分が思うほど妻の評価を得られていないケースも多いようです。



出典：東京ガス都市生活研究所「共働きの家計に関する調査」2016年

都市生活研究所ホームページはこちら
<http://www.toshiken.com/>